

名 称	千葉県体験活動ボランティア活動支援センター
所 在 地	〒277-0882 千葉県柏市柏の葉4-3-1 さわやかちば県民プラザ内
連 絡 先	TEL/FAX：04-7135-2200  URL：http://www.pref.chiba.lg.jp/clis/mb/

## 地域の現況・特色

活動対象地域の人口 千葉県 6, 115, 375人（平成19年12月現在）

当支援センターは千葉県の北西部、柏市の柏の葉地区に位置し、生涯学習の推進を図るための「生涯学習センター」及び参加型芸術文化活動の推進を図るための「芸術文化センター」の機能を持つ複合施設「さわやかちば県民プラザ」内に設置されている。

柏の葉地区は、県立柏の葉公園や柏の葉総合競技場、国立がんセンター東病院、東京大学や千葉大学環境健康フィールド科学センター、東葛テクノプラザなどの高等教育機関や研究機関など、特色ある公的機関等が数多く隣接している。また、平成19年8月で、つくばエクスプレス（TX）開業2周年を迎え、交通の利便性が向上し、駅前には商業施設のオープンや集合住宅の建設など大きく変貌しようとする、活力あふれる地域となっている。

## 事業の名称、活動概要

名称 体験活動ボランティア活動交流会Ⅲ 「子どもチャレンジプロジェクト」

「体験活動ボランティア活動交流会」は、ボランティア活動推進事業の一環として実施され、県内のボランティア活動者、ボランティア活動に興味を持っている方、さわやかちば県民プラザ施設ボランティア及び学生ボランティア等における、ボランティア活動に関する実践発表、活動報告及び意見交換などを通して、ボランティア活動に関する情報を共有し、ボランティア相互の交流を図るとともに、ボランティア活動の普及啓発を促進することを目的としている。

体験活動ボランティア活動交流会Ⅲは、小学生を対象にした講座として位置付けられている。さわやかちば県民プラザ近隣の小学生を対象にプロジェクトメンバーを募り、児童の自由な発想を生かした自主企画を運営させる。このような実践的な活動を体験させることにより、参加者の自主性や社会性の育成を目指している事業である。

## 事業の実施に至る背景、連携・協働のねらい

子どもたちを取り巻く教育課題が錯綜する中、子ども主体となる特別活動の時間が削除される傾向にある。また、地域力の低下により、子ども同士が関わる機会が減少している。このため、子どもたちの自由な発想と、それを生かせる場を提供するとともに、子どもたちが実際に「やってみたい」と思うことを実際にやらせる過程で、自らの力で作り出す楽しさや達成感を味わわせることをねらいとした事業が必要であり、そのねらいを達成するためには、家庭、地域の連携・協働の取組が重要と考えた。

子どもたち一人一人に目を配りながら対応するためには、体験活動ボランティア活動支援センターボランティアコーディネーター（3人）だけではなく、当センターボランティア経験者（地域住民・学生）や子どもチャレンジプロジェクト体験者（中学生・高校生）もサポーターとして協力していただくとともに、学校や保護者にも活動の様子を積極的に伝え、社会教育施設、家庭、地域、学校が一体となって子どもたちを支援する体制を目指すこととした。

## 事業の内容

### ① 事前準備として行った取組（企画段階）

本支援センター近隣の小学校11校の4年生以上の全児童分に、要項（リーフレット）を配布した。配布するに当たり、以下の点に留意した。

- ・ 柏市、流山市の教育委員会に事業の趣旨を説明する。
- ・ 関係小学校長に事業の趣旨を説明するとともに、要項（リーフレット）の配布を依頼する。

また、活動を支援していただくサポーターに関しては、運営方針を事前に確認する場を設定した。確認事項は、①基本的に「待ち」の姿勢で臨む。②直接リードする言動は避ける。③子どもと同じ目線で考える。④その場をスタッフも楽しむつもりでサポートする。⑤子どもの声を何でも聞いてあげる姿勢を持つ。⑥子どもたちが自ら考え行動できる環境づくりを心掛ける。⑦固定概念を捨てて接するよう心掛ける。⑧失敗体験を大事にする。⑨学校と連携を図る。⑩共に学び、成長し合う関係を目指す。の10点である。

保護者には、6点について依頼した。

- ・ 欠席する場合の連絡
- ・ 行き帰りの安全面の確保
- ・ 活動を共有する場を家庭でも持つ（かわら版（広報誌）を通して）
- ・ 些細なことでも、気になることがあれば連絡し合う

以上の取組みを通して、教育委員会、学校、家庭、サポーターが事業の趣旨を理解し、より強固な連携・協働の体制が築けるものと判断した。

## ② 活動の展開内容（活動段階）

「子どもチャレンジ」の展開内容を①実際の子どもの活動としての側面、②サポーターの側面、③保護者との側面、④学校との側面に分けて説明する。

### ○子どもの活動としての側面

- ・ 10月第1週の土曜日から活動を開始する。
- ・ 10月・11月は隔週、12月・1月は毎週土曜日を活動日とし、2月第2週日曜日がイベント開催日とする。
- ・ 活動内容として、①施設の把握 ②やりたいイベントの集約 ③準備作業（役割分担や対応についての準備） ④前日準備 ⑤イベント当日 ⑥事後の反省

特に、①②の過程では、子どもたち同士のコミュニケーションや企画力の醸成や話し合いの場作りに腐心した。

### ○サポーターの側面

- ・ サポーターの第一の役割を、子どもたちが自ら考え行動できるような場づくりと子どもたちの「やってみたい」を実現するための環境づくりとする。
- ・ 参加者同士の間関係作りを見守り、時には調整役となる。
- ・ 様々な価値観を持っているサポーターと接することで、参加児童同士の視野を広げる一助とする。
- ・ 毎回活動時間終了後、その日の子どもたちの様子や活動全体を振り返り、サポーター全体で共有する。

### ○保護者・学校との側面

- ・ 活動の進行状況や様子、サポーターの意見等をまとめた「かわら版（広報誌）」を毎週発行し、活動の内容を認識してもらう。
- ・ 定期的に学校長宛に「かわら版（広報誌）」を届け、学校側からも活動への賞賛を参加児童に伝えてもらう。
- ・ イベント開催のリーフレットは、参加児童から学校長に届け、活動の状況や成果を報告させる。

## ③ 連携・協働に当たってのポイント・留意点

平成19年度の参加児童は34人であった。学校や学年が違う児童のモチベーションをどのように持続させるかが課題となる。そのためには、話し合う環境の構築と家庭との連携が重要と考える。

### ○話し合う環境の構築における留意点

参加児童の自治的能力を高めるためには、一人一人に対してのきめ細かい対応が欠かせない。そのためには、サポーターの役割が重要となる。

- ・ サポーター間の共通認識の確立
- ・ 運営方針に沿った共通の接し方
- ・ どの意見にも耳を傾け、取り上げる姿勢
- ・ 状況に応じた声掛け 等が留意点といえる。

## ○家庭との連携における留意点

学校文化や発達段階の違いから、参加児童の反応は千差万別である。

- ・ 意思が伝えられない。
- ・ 人間関係が築けない。
- ・ 家庭での会話が少ない。

等、保護者にとっての心配事に対して、「かわら版（広報誌）」の発行と電話による相談を通して対応している。

## 事業の成果と今後の課題

### 【成果】

- ・ 保護者やサポーターの協力を得て、充実した話し合いが展開された。平成19年度においては、フリーマーケット・クイズ大会・お菓子教室・人形劇・おぼけやしき・迷路・鬼ごっこ・スタンプラリーが計画されている。どの内容も、学校の教育課程内では実践が難しい内容といえる。
- ・ 参加児童とサポーターの信頼関係が構築されている。様々な傾向の子どもたちを包み込み支援する姿勢は、カウンセリング効果があると推測する。
- ・ 子どもチャレンジプロジェクトを経験した中学生、高校生がサポーターとして参加するようになった。経験者として、また同世代としての視点で関わりを持ってくれることは意義深いことである。連携・協働の輪が広がりを見せている。

### 【課題】

- ・ 子どもからの判断を待つ姿勢で運営しているため、時として場の雰囲気が弛緩するときがある。その雰囲気から立て直すことも学習なのだが、参加児童の発達段階の違いから、「思うように話が進まない」「遊んでもよい時間」ととらえる子どもも少なくない。
- ・ 活動日が土曜日ということもあり、参加者全員そろうことが少ない。協力や意欲の持続という視点から、サポーター側の対応や講座運営面で課題が浮かび上がってきている。



話し合いをしている様子



活動の準備をしている様子



準備をしている様子



イベント当日の様子

執筆者職・氏名： さわやかちば県民プラザ 主査 西村 淳

コーディネーターからの一言コメント

子どもの自主性とその達成感を大切にすることを、連携する学校、家庭、教育委員会、サポーターが共有している点がとても良い。以前に経験した中高校生がサポーターとして参加することも。ただ、「待ち」は放任ではない。

(橋本 洋光)